尾竹紅吉（富本一枝）という女性（ひと）（2）
――制度という軛

大東文化大学名誉教授　渡邊澄子（会員）

共に東京美術学校（東京音楽学校と統合されて現在は東京芸術大学）卒者の高村光太郎（１８８３～１９５６）と富本憲吉（１８８６～１９６３）はほぼ同時代に欧州を私費留学した新しい男の象徴といえるだろう。だが一八六七年生まれの漱石には遠く及ばない。漱石は繰り返し、女は結婚すると娘時代の天真が損なわれる。失わせるのは夫である男であり、結婚の制度であると書いている。

『番紅花』創刊に一枝は表紙絵を憲吉に頼んだ。雀躍した憲吉は鹿沢温泉に逗留して一枝を熱心に誘った。憲吉も一枝も筆まめで見事な字で手紙をよく書く人だがこのときの一枝の長文の返事は残されていない。男から女への書簡は残されていても逆の手紙は残されていない場合が多い。制度という軛の一証左だろう。憲吉の熱い誘いに応じた鹿沢温泉での数日は憲吉を三度目の正直で舞い上がらせた。プロポーズは、尾竹でも富本でもない新しい家をつくり共に美を追及しようだった。この言葉が一枝の心を奪った。結論を先に言ってしまえば、智恵子に対する光太郎にも言えるが、傑出した新しい男の底にこびりついていた男尊女卑、家父長制度の残存に一枝も智恵子も気付けなかったばかりでなく、母の躾が自分を縛っていることにも自覚できなかったことが「私」を肩幅いっぱいに生きられなかったと言えると思う。

『番紅花』を投げ出して結婚した一枝は、二度行った大和の田園への憧れから安堵村での生活を求めたが、旧家の長男の「嫁」の座は美しい大和の自然とは裏腹に苛酷だった。憲吉と並んでの食事も許されず、田園生活への幻想は無惨に打ち砕かれた。新宿中村屋の創業者相馬黒光は信州穂高の代々庄屋をつとめた家の長男相馬愛蔵と結婚したが「嫁」の座に泣いたのだった。黒光の「嗚呼田舎よ、汝は如何に陰悪で猥褻なるよ、我は汝を追想する毎に一種云ふべからざる不快の感を喚起せざるを得ざるなり」、「ウォーズ ウォースの詩に迷ふ勿れ、ロングフェローの歌に酔ふ勿れ」は一枝の思いでもあった。新しい男の憲吉は見かねて近くに家を建て、一枝の「私たちの生活」が槌屋と呼んだこの家で始まった。富本芸術にとっての大和時代である。長女陽、次女陶が生まれると一枝はルソーの『エ

ミール』、フレーベル、ストナーその他を読み込んで子どもの養育に取り組むが、これほど力を注ぐ母親が他にあるだろうかと呆れるほどである。楽焼きを中心に模索する憲吉にも寄り添っている。四季に応じて咲き実る庭の、花、野菜、果物を使いながら憲吉のよき相棒になっていたバーナード・リーチの妻に教えられて、パン、マフィン、クッキー、ジャム、ローストビーフ、陽の大好きだったウーフ・ア・ラ・ネージュまでの手造りは家族や来客を喜ばせたが、一枝の作る料理は玄人はだしだったという。例えば味噌汁について書いたエッセイの出汁（だし）について。

「だしに昆布と鰹節と焼小干（イリコ）魚を使うが味噌と具によって使うだしが違う。具に海藻類を使うときは幅広いぱんとした板昆布を使う。昆布はぐらぐら煮たら甲斐はない。鰹節は力をいれずに削る。イリコだしは小さな干鰯子をホウロクでよく炒る。鰹節の場合と同じように昆布を引き上げたあとへイリコを入れて、汁が一、二度煮え上がった時におろし、鍋はしばらくそのままにしておいてから、漉しざるで小魚をとる。具に合わせて味噌やだしを加減する。具にはしじみやあさり。あさりは前夜から金気の包丁をさしこんだ水のなかで砂をはかせておいたものを、摺鉢で擦ってから塩で幾度も水洗いする。里芋や八つ頭はぬめりをとるために二度も三度も下煮の湯をとりかえ、ぬめりが取れたら煮立った味噌汁に入れてそのまま火から下ろす。好みで唐辛子粉をふりかけたりもする。白味噌仕立ての豆腐汁は絹漉し豆腐を形を崩さずきれいな采の目に切り、下ろし際に三ツ葉を色鮮やかに投げ入れる。みじんに切った葱を入れる時は赤味噌にする。豆腐をよく摺ったものに葛粉を溶いてまぜ合わせ、かき卵を汁に流しこむ要領で煮えている味噌汁にゆっくり流し入れ、新海苔をよくあぶってもみ海苔にして振りかける。香ばしく炒った黒胡麻をよく摺ってから昆布だしの赤味噌に加えた胡麻味噌の豆腐汁もおいしい。冬菜、小蕪、大根、葱、薄揚、こんにゃくなどを細かく刻んで実にした、舌が焼けるほど熱い味噌汁は身体が温まる。焼麩と茗荷、卯の花や切干し大根、鰌汁や鯉こく、塩抜きした鮭の頭を人参や大根と煮た酒粕入りのもの、若芽は水に入れてもどす。先に芯を取っておき、だしは濃い目に。納豆汁は味噌汁でさっと煮てから手早く杓子ですくいとり、摺鉢でよく摺りつぶしてから煮えている味噌汁に混ぜ込み、刻み葱をふり入れる」。

長い引用になったが、一枝の人柄がしのばれる格好の例だろう。私などには呆気にとられるばかりだが。

陽が四歳、陶が二歳になると奈良女子高等師範学校に連れていって個人教育を受けさせ、その後は家の裏手の空き家を教室にして、小原国芳の紹介による教師を招いて生徒二人の小さな学校を開設してしまうが、後に、社会性が育たずこの教育は誤りだったと書いている。陽の提案を実現した家族誌『小さな泉』を五号まで出してもいる。庄屋の息子が女のすることをすると笑いものになっても平気で、憲吉は洗濯物を干したり取りこんだり手伝う夫だった。子どもたちのおままごとの道具（茶碗、急須、カップ、皿など）は細筆で描いた模様も可愛らしいが、憲吉作の陶器で、ひらがなと片仮名のアイウエオの木片も憲吉の手造りだった。最高を求める二人は生活費に事欠いても娘の服はイタリアやフランスから取り寄せた。憲吉にパトロンがつくようになった。憲吉は一枝の美感覚、鑑賞眼に絶対の信頼を寄せていた。窯出しで真っ先に見せるのは一枝だった。「おーい、一枝」と呼ばれた一枝の鋭い批評眼・鑑賞眼にかなったものこそがいい作品であることを知っている憲吉は、一枝の評価に耐えなかったことを知るとせっかくの作品を

木っ端微塵にたたき割ってしまう。一枝の評価が正鵠を射たものであることを納得しているからだが、解放されていない男の権柄が顔を出して評価されなかったことで癇癪玉の爆発になり、その後では悔悟のしるしに丸坊主に刈るのだった。丸坊主の写真の多いのは爆発の回数の多さを示しているが、それでは、一枝が夫の機嫌を損ねないように批判がましいことを言ったり、顔をしたりしなければよかったのか。一枝にご機嫌取りはできない。世界の富本憲吉への道に一枝の存在は大きい。たたき割る場面を陽はじめ何人もが見ている。憲吉研究家として知られ、安堵の旧宅を富本憲吉記念館としてその館長をつとめた辻本勇が、富本芸術にとって一枝夫人の功績は大きかった、非常に厳しい批評だったので大喧嘩にもなった、一枝夫人を浪費家のように言う人もいるが、一例をあげると贅沢な蘭をたくさん買ってきて憲吉に叱られるが、でもそれを憲吉は描く。描く気にさせる。喧嘩はお互いにほんとに好きだからできること。仕事の上では最高の妻だった、と語ったという。二人が合作していた一時期がある。一九一七、一八年に東京神田流逸荘で「富本憲吉夫妻陶器展」が開催されているが、記念館には沢山の一枝のスケッチが残されていた。一八年作の「葡萄文蓋付壺」の底には「富一九一八」とあるが明らかに一枝によって描かれた模様であると副館長の山本さんは言い、他にも一枝の筆と思われるものが結構あるという。一枝は「富本の焼いた」と書かず「自分たちの焼いた」と書いていて二人の共作という認識だがここには傲慢さは微塵もない。憲吉もその通りと受け止めている。

　娘が個人教授を受けている間、一枝に憧れた女高師生たちに取り巻かれると、彼女たちを美術館や博物館に連れていくようになり、まもなく彼女たちは安堵の家に押しかけてくるようになったが憲吉は嫌な顔をしなかった。なかでも井出（後の丸岡）秀子は泊まり込むようになり、富本図書館と呼んだ一枝の蔵書の山に入り浸った。後に日本で初めて農村女性を直視した画期的著として名高い『日本農村婦人問題』（１９３７）は、一枝が秀子に農村婦人問題の重要性を教えたことによる、一枝が紹介の丸岡重堯と結婚後の労作である。

　夫、子、その他多くの人たちからなくてはならぬ人として頼られ、忙しく一日が終わった一枝を襲い来るのは、私を生きたい、私には私を生きる権利がある、なのに私は私を生きていないという悔しさ嘆きであり寂寥であって、ひとり泪を流すのだった。詩やエッセイを依頼されるようになってはいたが、その程度では自足できず、懊悩は深まるばかりだったが、この頃発表のものには「さびし」「おもひみだれぬ」「寒し」が頻出する。呻きの表出の一例に、「おのれのあるかなしの小さな才能をたのみよる心よ。おまえのために私はいつも苦しむ。おさへつけても、どんなにおさへつけても、すぐ溢れあがる泉のやうに滾々湧きあがるのだおまへは。私は苦しい。或時は仕方なくおまへを憎んだ。おまへを呪つた。おまへを邪魔にした。蹴り飛ばした。突き飛ばした。だがそれらはみなだめだつた。おまへと私はぴつたりひつつく。矢張りおまへが在ることが、どんなに私を生かしてゐよう。本当におまへを限りなく愛してゐるのだ、おまへを感じると私の心は生々と跳ねあがる。ふくれる。あるものに必死の力ですがらうとするときつとすがりつけるやうに強く確かな自信力がこみあがる。おまへを生かしきりたい。思ふだけ存分に。思ふだけ存分に生かしきれないのが淋しい」とある。一家はよく旅行する。憲吉の窯元訪問が目的だがそれならなおさら一枝がいなければ

ならないからだが、家族大事も憲吉の真実だった。だが、憲吉との相愛相敬への疑念はないものの、少しずつ彼が自分の自己本位を優先していることに気付き、一枝の自己本位への思いやりのないことの不満を感じるようになっている。

娘に呼び掛けた形の「母親の手紙」（1922・11）には「私はもっと勉強したいのです。その時間がもてない苦しさでなかなか寝付けずにいたとき」陽ちゃんが心配してくれたことがありましたね、「私が自分を捨て切れないためにまだ幼いあなた方をそんなに悲しませていたのかとショックをうけました」、でも「たとえ小さくても自分の仕事をしたいという自分の『我』を捨てきれないのです」、「それにお父さんとの生き方の違いもあるのです」。あなたたちが大きくなったらちゃんと話しますが、「すべてを疑え、信じるな、というお父さんの生きる姿勢と、すべてを信じ愛したい私とでは平行線なのです」。「私のさみしい気持を察してください。いまに大きくなったらわかってくれましょう」とある。憲吉が、一枝のこの絞るような哀しみを思いやり、妻のスピリットをこの手に掴みたい（漱石『行人』）と思ったことは、自分の仕事第一の彼にはなかっただろう。

自分を生ききれない苦しさで輾転反側しながらも毎日は忙しい。どんなに忙しくても紙とペンは離さず、わずかな時間を盗んでのエッセイ、感想、詩は一九一七年から『婦人公論』『女性日本人』その他に二五〇編以上発表している。そのどれかを読んだことで憧憬を深めた奈良女子高等師範学校の生徒たちが土日に押しかけたことは既に述べたが、一九二一年に創立された自由学園の第一回生たちが羽仁もと子に引率されて関西に来たとき、一枝の家にも立ち寄っている。そのときの生徒の中に石垣（当時は田中）綾子や村山（当時は岡内）籌子がいた。彼女たちも初めて会った一枝に衝撃を受けたが、以後頻繁に「人生の指針を求めて訪ね」たという綾子は、「いつもすらりと伸びた長身の背すじをのばし、髪は前を少しふくらませて上へ持ち上げ、くるくると束ねて長い襟足をみせていた。観音像を思わせる顔に白粉気はなく、久留米絣の対に黒い半襟、幅の狭い帯を低目にゆったりしめている。常識をこえたおしゃれっ気と、絵描きらしい独特のセンス」の「多くの若い女性に恋心を抱かせた不思議な美しさ」に「心惹かれ」て泊まりがけで押しかけ、「二人の女の子を挟んで寝る蚊帳に入り込んだ。夫妻には迷惑至極だったろうが、私は一枝のわきに眠れるのがうれしかった」と書いている。重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された染織家志村ふくみの誕生もその淵源は一枝といえる。ふくみの母は夕陽丘高等女学校で一枝の妹福美と同級で親友だったので校内一の人気者一枝とも仲良しだった。「ふくみ」は「福美」から勝手にもらったという。三児の母になっていたある日偶然、阪急電車の中で一枝と会い、そのときから終生の友人となり頻繁に文通を重ねたが「あふれるような豊かな筆致の三㍍にも及ぶ手紙」もあった。「カマヒラク　アスコラレタシ」の電報で訪ね、「女かて、自分の思いを貫いて生きている人がいはる」と心を揺すぶられて社会活動をするようになったが、民芸運動に関わって知った青田五良の草木染めに魅せられたが引き継げなかった。その後、娘のふくみが「結婚にやぶれ」子どもを抱えたこれからの生活に賭けたのが母が執着した草木染め織物だった。ふくみは一枝と憲吉から教えを受けながら不退転の決意で未開拓の領域に分け入り、今日を築いたのだった。初めて富本家を訪れた日のことの記憶は鮮明だ。そのとき一枝は白磁の大壺に臘梅を活けていたが、「あふれるような黒髪を、ゆたかに結

い上げ、唐桟の着物に、濃い臙脂の半襟をわずかにのぞかせ、帯は思い切り下めに、幅広くざっくりと締めて、大幅の花がゆらぐようだった」、思えば「夫人は私にとって、出会うべきわずかの貴重な存在の方だった」。その後、ふくみがこの道に入ろうとしたとき、「家庭を捨てるなら思い切って捨てよ。出たり入ったりして、夫や子供に未練を残してはならない。あともふりむかず仕事に没頭しなさい。私はそれが出来なかった。あなたはやりとおしなさいよ。本当に捨てたものは、また別の形で必ずかえってくる」と言われ、「捨てるに捨てきれずに混迷の極にあった」ふくみに道を切り拓いてくれ、以後もふくみの仕事を見続けて「骨身にこたえる鋭い批判で」苦言を呈してくれたという。一枝からの手紙について、「巻紙の上に、花とかけば花が、風とかけば風が舞い、美が充満してくるような文字であり、達意の文章であった」（『一色一生』）と書いているが、私のもらったふくみの手紙も美しい文字だった。

そんな一枝を驚愕させたのは夫の背信だった。秀子の紹介でこの家に来たお手伝いさんと憲吉が男女の関係をもっていたことを知ったのだ。二年間も気付かなかったことへの自虐からうろたえた。愛が深ければ深いほど背信を知った心の傷口は深い。

憲吉の背信を知ったのは何時だろうか。一枝が小説を意図して書いたものに「貧しき隣人」（１９２２・11、『婦人公論』）と「鮒」（１９２６・10、『週刊朝日』）がある。憲吉の背信を知った後の作品は「鮒」で、こちらの方が数段優れている。文学年表に刻印されていいレベルの作である。一枝にとって小説家は少女時代からの見果てぬ夢だった。紙幅の都合からうわ撫でに紹介したい。「貧しき隣人」には「この一篇を山本顧弥太御家族に捧ぐ」の献辞がつけられている。山本顧弥太は関西の実業家で『白樺』の求めに応じてゴッホの「ひまわり」を購入した美術愛好家だったが憲吉の作品の蒐集家でこの時代の最大の後援者だった。一家はこの人に随分助けられた。たとえ生計の現実が火の車でも最高の作品を生み出すためには惨めであってはならない、贅沢なライフスタイルを通せたのはパトロンのお陰である。パトロンは他に憲吉の作品の最大のコレクターであり経済的援助を惜しまなかった新潟の伊藤助右衛門。この人とは家族ぐるみで滞在したりと親しかった。大正期の後援者に大阪土佐堀で美術店を経営していた森川嘉助のほか、写真雑誌『光画』を主宰し、写真を美術として位置づけた野島康三がいる。彼は東京小石川の自邸で毎年憲吉の個展を開いて憲吉の仕事を世に広めてくれた人だ。

「貧しき隣人」は島崎藤村の『破戒』が背景にあり中條百合子の『貧しき人々の群』が意識されていたかもしれない。人の好い私が断るわけはないと見込んで四、五日おきに草箒と草履を売りに来るお篠婆は病身の息子と貧しく暮らす被差別部落の人。物置は草箒と草履で溢れそうだ。もういらない。いくら断っても去らない。買わずにお金を渡したのではお篠を乞食にしてしまう。そんなことはできない。断れという夫と諍いになる。次に来たとき私は出て行かない。仕方なく出て行った夫の困惑ぶりに思わず笑ってしまう。この笑いが二人を仲直りさせた。その後十日以上も姿を見せない。来られるのは迷惑なのに来ないと妙に心配になる。息子の病気が悪かったからと言い、やっと姿を見せる。「しばらく顔をみんと寂しい」のお篠の呟きに私は人間の真実を感じてはっとする。読書家の一枝のトルストイの影響が見られる差別・人間の尊厳・人権問題への思想が反映した作だが、同時期『中央公論』掲載の野上彌生子「澄子」よりはるかに上等作だ。チャ

レンジ意識で書かれた「鮒」は明らかに憲吉の背信を知って以後の作品と読める。二四年は三月に風光明媚な伊勢の的矢に一枝は娘たちと長期滞在しているが憲吉から孤独の寂しさを訴え、日常の細部までを綴ったほかに仕事の相談を記した手紙が頻繁に送られている。なんば（とうもろこし）が熟したので送る、窯が開けてから西瓜を送るなどとあるが一枝は一切返事を出していないようだ。先入観によって読んだためかもしれないが、背信発覚の慚愧から下手に出てご機嫌取りしているようだ。その後、越後の伊藤家に娘と滞在しているが、六月から十月にかけて本郷弓町の中江百合子の家に長期滞在している。中江百合子は俳優東山千栄子の妹で料理研究家。この家に滞在中、憲吉の初めての著書『窯辺雑記』（１９２５・11、文化生活研究会）の出版があって、文章の添削、造本、題字、挿絵、構成、用紙すべてを憲吉から任され、染みこんでいる母の躾の「良妻賢母」によるのか、本造りという一枝にとってわくわくの仕事だったことによるのか懸命にとり組んでいる。中江家長期滞在は背信問題で何日も徹底的に話し合った後だが、どんなに話し合っても傷は癒えず、距離を置きたかったのだろう。藤村に作品を読んでいただけないかと手紙を出したのはこの家からであり、中江方一枝に返事がきている。そこには「よろこんで拝見」します、河井酔茗から贈られた『現代婦人の手紙』収載のあなたの「父上に」を読んであなたへの理解を深めた、自分の作品も読んで欲しいので二、三冊送るとある。一枝は「鮒」を持って藤村宅を訪ねている。合格か不合格か待ちくたびれた四か月後、「好いお作」だが深刻な作品なのでモデル問題が心配の返事。藤村は自身の『新生』問題から躊躇したらしい。「鮒」は書かれてから二年半後に、藤村の「鋭い感知力なしには」「叶はぬ」、「鮒」を「象徴にまで持って行った」作との推薦文がつけられて『週刊朝日』に発表された。

お新は安吉を心底から憎んでいる。夫の俊造が弟の晋二と釣りに出かけた後、食事の準備で後回しになった寝室の片付けを始めたとき安吉がやってきた。「いやな奴、いやな奴」。お新が安吉をこれほど嫌うのはお新が相愛の俊造と結婚して東京からこの田舎に来たとき、近村きっての大地主の息子で俊造の甥の安吉に「余所者、余所者」といじめられたばかりでなく、「伯父さんには面白いことがあったんですよ。情事にかけてもね……」とにやにや笑い、美人のお勝と結婚するはずだったんだ、と卑しげに言われた屈辱感が消えないからだった。俊造の愛情を信じて安心しきっていたお新の心に寂しさが溢れ、このときお新は生まれて初めて泪の痛さを味わったのだった。その後も思わず寝過ごして夫を送り出してから寝床の始末をしているところに、のっそり入ってきて寝室をじろじろ見たりする安吉に我慢ならないのだ。絶対の信頼関係と思い込んでいた夫にときに影のさす一瞬に襲われたりするようになった安吉が憎い。俊造たちが釣りから帰ってきた。安吉は途中で帰ったという。よかった、と嬉しさを隠しきれない。覗き込んだ魚籠のなかの柳ばやが美しい。すると大きな鮒がよろめくように浮き上がってきた。擦り傷に血を滲ませて泡を吹くと力なく沈んでいった。安吉が釣ったのだという。死んでしまう前に早く鉄砲和えに料理してくれと急かされ、死にかけてるんじゃ気味悪いと手を出さないが、深い藍色の苦しげな目の鮒が安吉とひとつになった。目をつぶって思いっきり遠くに放り投げ、遠くの方で麦がざわざわと揺れたのをぼんやりと凝視ながら「指先に残った、ぬるぬるとした気味悪さを、幾度も幾度も拭ひとってゐた」という心

理小説である。信じ切っていた夫の過去に女性のいたことを夫の縁者から侮蔑的に知らされた屈辱と怒りと哀しさ、田舎びとの無神経さで私生活に泥靴でずかずか入り込まれる耐えがたさなど、男性には理解しにくいだろう微妙な、そして切実な心情が巧みに表出されていて、この時期の年表などに採取収載されている女性文学に充分拮抗し得る作である。

少女の頃から文学好きだった一枝にとって「鮒」に賭ける気持もあっただろうが惜しくも続かない。憲吉の女性問題に絡んで安堵村での同居生活に居たたまれなくなったのだろう、陽の教育問題もあって東京の学校に上げようと中江百合子方に長逗留して娘を成城学園に入れているが実質的別居生活だ。憲吉からは頻繁に手紙がきているが少し変化が見られる。これまでの「一Z様」、「K」または「KEN」が他人行儀に「一枝様」「憲吉」となっている。一枝に対する懺悔・謝罪の気持からか、妻子が世話になっている中江の分と一緒に梨を三箱送る、寒くはないか、セルを送るが毛布はいるか、などと、仕事の進展報告や寂しさの託(かこ)ちとともに細やかだ。越後の伊藤から送金があるはずだから入金しだい送る、そして言わずにいられない。「矢張り一週一度位皆と遇つて話したり、けんくわする」のがいい、「もうそろ〳〵帰る事にしては如何、何時帰るか」、送った松茸や原稿について無音は何故か、あなたが帰ったとき少しでも楽しみが深いように、自分の考案した竹製ベッドを二日がかりで作った、ふたりが乗って踊っても大丈夫で、分解して送ることもできる、子供用が必要なら作って送る、などとご機嫌取りしていて、自分たち夫婦は安堵で暮らし、子どもたちは東京の学校に通わせると考えていたことが窺われるが、一枝の気持を忖度して家族みんなでの東京暮らしも考慮されている。生家は別荘として利用するとして、家族四人の想い出多い槌屋を捨てるのは惜しい、生まれた家とか家名などに何の愛惜もない、富本という名への執着など全くない、移転先は東京も一候補として二人で歩いて場所を探さないか、その相談もしたいので一度帰って欲しい、大阪でも法隆寺でもいい迎えに行く、などと細やかで真剣だ。代々庄屋をつとめた素封家「富本」はなくなってもいい、でも新しく築いた家族の想い出の詰まった家「槌屋」を消滅させるのは忍びないと言う。一枝との結婚に際して富本も尾竹もない二人の新しい家をつくるのだと言った「家制度」から解放された近代の息づきの蘇りが見られる。夫の仕事の最大最高の理解者であり共走者である一枝を嘆かせ怒らせたことに忸怩たる思いに苛まれての懺悔の心情を縷々と綴った長文のこの手紙は感動的である。一枝はどんな返事をしたのだろうか。返事はしなかったらしい。一月の手紙は一枝が妹福美の結婚先安宅に寄留していたらしく「安宅氏気付け」となっていて依頼原稿の随筆「野菊の茶碗」の添削を頼んでいるが、「シーツを四枚洗濯して今アイロンをかけて居た処が夕暮がせまって来て余りのさみしさに、何むだか頭が悪くなる様な気がした」とある。同情を誘おうとしたのか。二六年の憲吉年譜には「一月、柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司が安堵に来訪。八月、家族とともに出雲玉造温泉に滞在。十月、娘二人を開校予定の成城学園女学校に進学させるため、東京に移住。千歳村（現　世田谷区上祖師谷）の新居の設計。とあり、翌二七年は一月二日、長男壮吉生まれる。四月、新居に移る。八月、築窯にとりかかる。九月、資金調達のため野島康三を窓口に陶器を頒布する会の計画をたてる」とある。

深い怒りと哀しみは何度話し合っても消え去ることはなく苦しんだが玉造温泉行きは落ち着きを得たからだろうか。長

男誕生は陶誕生後十年経ってである。男子誕生に憲吉はリーチに雀躍の手紙を送っている。祖師谷の家はこの時代に水洗トイレの洋風で、窯開けの日は大勢が詰めかけ、また一枝に癒やされたくて集まる女性作家やお仲間たちのサロンとなった四〇畳もある広間や、泊まり込む人たちもいた部屋数の多い見事な家だったという。「東京に住む」（１９２７・１）には東京移転の理由の最大は、それ以外は枝葉と言えるが人間間に起きる危機で、「久しい間そこに悩み、嘆き、かなしみ、ありだけの人間らしい悲痛な感情」を味わい尽くした上で這いだしてのことだった、と書いているがこの頃の日記には煩悶する一枝がリアルに吐露されている。以後二〇年間の「東京時代」は富本芸術における円熟期で富本憲吉の名が不動のものになった時期である。そこに一枝の力は見逃せない。「大和時代」は富本芸術における模様についての確信「模様から模様を造らない」を得て「曲がる道」「大和川急雨」「竹林月夜」など模様の概念を一新させた生新な風景模様を成立させたが、「東京時代」は世界の憲吉に飛躍させた時期で色絵磁器の本格的制作は庭の定家葛の花の五弁を四弁に創案した「色絵四弁花模様飾壺」「色絵赤更紗模様飾壺」などの生涯の代表作を生み出している。国画創作協会に工芸部を新設し、帝国芸術院会員、文展審査員、東京美術学校教授就任など公的な活動にも乗り出した時期でもある。開窯日の広い応接間は興奮で沸き返り一枝の自然体だが誰をも充たす接待によって至福の時を共有する場となった。憲吉は一枝への感謝の気持もあったのだろう、一枝の仲間に「秀子愛用」「俊子愛用」「須磨子愛用」などと名入り茶碗をプレゼントして喜ばせている。

『女人芸術』が長谷川時雨によって創刊されたのは一九二八年七月だが、この年三月の共産党員たちの大検挙３・15事件があり、特高警察設置という戦争の時代に入っていて文学界もマルキシズム理論に拠ったプロレタリア文学の高揚期にあった。時雨も事実的伴侶で出資者の三上於菟吉も左翼ではなかったが潮流のしぶきを避けることはできなかった。この雑誌掲載の一枝のエッセイは紙幅の都合で引用できないのが口惜しいがなかなかいい。平塚らいてうが近くに住むようになり、娘や息子が一枝の子たちと歳が近く学校も同じなので家族ぐるみで親しんだ。らいてうの留守中に娘の曙生が急性盲腸炎になったときはいち早く気付いた一枝の気転で一刻を争う危険な状態を免れるなど、細やかな気配りをしている。奥村博史は画家として自立できず家計不如意を救う手立てとして、憲吉の作品展開催時に主催者の不許を押し切って趣味で作っていた指環を並べたところ思いがけず好評だったので、指環作家として一枝も発起人となった頒布会を立ち上げ、三五年にも憲吉近作陶器展の一角に「奥村博史の指環」を併陳するなど博史を押し出す援助をしているのに、らいてうが一枝について触れた文章は意地悪い。娘と夫の看病に疲れ果てたらいてう慰労の会を資生堂で仲間と開いたとき、『青鞜』の人たちへの批判を隠さず、女性作家では宮本百合子以外を評価しない野上彌生子が珍しくここに出席していて、この日のことを日記に、「富本さんの美しい熱情を今夜見た。彼女はたしかに純真なこころを持つ」と記している。そこらの作家とは違うという特殊人を自認している彌生子の没後岩波書店からの刊行が前提とされていた厖大な日記の記述は生な感想が多い。戦争下、一枝が彌生子に反戦運動へのカンパ依頼に陽を使いにだしたらしいことが書かれていて、カンパしたのかどうかは書かれていないが、陽の美しさに感心したことが書かれている。ア

ナ・ボル対決が過熱化し、マルキシズムが優位にたち発禁が相次ぐようになって『女人芸術』は廃刊された。満州事変勃発で弾圧激化、検挙者の相次ぐ状況下で滝川事件、佐野学・鍋山貞親の獄中転向、小林多喜二虐殺と続くなかで目をつけられていた湯浅芳子との交友関係から注意人物とされわずかなカンパによって一枝が検挙されたのは三三年八月五日で十八日に釈放されるが、入れ替わりに文化学院生だった陽が検挙されている。矢田津世子や林芙美子までが検挙されている凄まじい時勢だった。「憲吉夫人」と新聞に載って憲吉を激怒させ、家に帰りついた一枝は庭に蹴落されたという。ライフスタイルは近代的だが憲吉は宮城や明治神宮の前を通ると車中でも直立不動で最敬礼し、四五年刊行の『富本憲吉陶画集』には末尾に「この画集を謹んで荒鷲に捧ぐ」の献辞をつけたりする思想の持ち主だった。愛する人とのこの生き方の違いが一枝にとっての辛さであり、これが晩年の一枝の生き方に繋がっている。

廃刊に追い込まれた『女人芸術』の後継誌として時雨は『輝ク』（１９３３・４〜１９４１・11）を創刊した。多喜二虐殺の年である。この雑誌は軍部べったりの戦争使嗾・謳歌を加速させた性格で、時雨は「輝ク部隊」員に慰問袋の献納や遺児、遺家族、傷病兵の慰問などを競わせる叱咤激励を本気でしていて、陸・海軍からの感謝状に感激してもいる。戦地の兵士慰問の『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』を陸・海軍の恤兵部の協力のもとで刊行してもいる。宮本百合子も窪川（佐多）稲子も参加・協力しているが、『女人芸術』ではブレインの一人だった一枝だが『輝ク』には一切の協力を絶っている。東條英機内閣が成立して米英を敵にまわした太平洋戦争勃発後は言論・出版・集会・結社などの取締り激化で文学者も戦争に動員される時代になるが、物資欠乏で国民は悲惨な生活に追い込まれる。このようななかで芸術的香気の漂う一枝の家の応接間は多くの女性たちの息継ぎのできるサロンとなった。とげとげしい気持の柔らかげにはまず食べることだろう。食料調達の買い出しに一枝は行かねばならなくなった。頼りになるのは大谷藤子だった。女を愛する藤子は文壇きっての美女矢田津世子のコント作家から芸術的完成度の高い純文学作家への飛躍に手を貸した人だが、津世子の没後、津世子とは異なる魅力に満ちた一枝の力になろうとして頻繁に生地秩父から食料を届け、また一枝と一緒に買い出しにも行き、一枝の家に泊まり込むことも多くなった。この頃の一枝について藤子の記述に、独特の美感覚から買い出しはリュックが常態だったが一枝はリュックは背負わず、手造りのなかなかモダンな袋、もんぺは最後まではかず、一枝の人となりによって、買い出し先の強欲な農家の人たちを親切にさせてしまったなどとある。

四五年四月、資材入手絶望の判断から祖師谷で最後の窯を焚いて閉窯とし、東京美術学校の教授と兼任していた工芸技術講習所の生徒と職員を引率して資材調達可能な高山に憲吉が疎開したのは五月だった。空襲激化で一枝たちは藤子の母の家に疎開することになっていた。高山の憲吉から早く秩父に行け、早く、早くと矢のように電報が届き、長期戦覚悟で自分も十一月には秩父に行く。とにかく先に早く行けと怒るように急かされて藤子の生地の秩父に一枝たちが疎開したのは七月だったが、ひと月も経たずに敗戦で終戦となり、空襲を逃れた祖師谷の家にすぐに戻っている。生徒たちを東京に帰した憲吉は資材調達の可能な高山に留まった。四六年四月の新選挙法による総選挙に際して憲吉不在の家を開放して徳田球一を支援するが、その後戻った憲吉

は一枝を忌避して単身で安堵に戻っている。憲吉年譜には「一九四六年（60歳）六月、東京の窯を閉鎖して、単身安堵に帰る。七月、東京美術学校教授を正式に辞任。十月、帝国芸術院会員を辞任。十二月、国画会を退会」とある。戦後の陶芸家としては二二年二月の「富本憲吉新作品展」（大阪・高島屋）から始められている。「東京の窯閉鎖、単身安堵に帰る」の裏に事は起きている。憲吉不在の家に藤子が頻繁に来ていたことから、戦争下でも大勢の女性たちが集まり芸術的香気の漂うサロンへのやっかみから誰かがフェイクを憲吉に囁いたのだろうか。それをまともに受けて吹聴して歩いた憲吉の一枝への愛とは！　憲吉の一枝忌避は一枝と藤子が穢らわしい性的異常者の同性愛関係と聞かされたことによる。長年の生活を通して一枝が性的異常者であるかどうかは一番よく知っていたはずではないか。明日がわからぬ戦争下を離れて暮らしていて神経がノーマルな状態ではなくなっていたのか、女性問題で散々痛めつけられた辛さが一挙に噴き上がったのだろうか。一枝が陽に宛てた長文の手紙が残っている。最後の用紙の裏に陽の筆跡で「21年暮（？）　父のこと　母の手紙　最後に父が家を出たあとのもの」のメモ書きがある。水沢澄夫が「あの人はレズビアンだった」と憲吉から聞いたと語ったということを井手文子が書いている。娘を対等の人格として、夫に妻はレズビアンと吹聴されていたことを知った屈辱感と怒りを吐露した感動的手紙である。離婚も構わないが離婚はお父さんの妄想と酷さを承認したことになり、それは子どもたちのためにもできない、狂人じみた烙印を押されても人々から信頼され、大道を顔を上げて歩けるか、「お父さんのやりかたに沁々つらい泪がながれます」などとあって辛さが思いやられる。ジェンダー視点などのない「教育勅語」の時代にあって、レズビアンは薄汚く穢らわしい変態性欲者とされていた。

憲吉は以後東京に戻ることはなく、京都を拠点とした「京都時代」になるが、この時代は仲間の窯を借りる〝放浪の陶工〟として色絵金銀彩を完成させたが、これは華やかさから外国で喜ばれたらしい。芸術度の最も高かったのは「東京時代」と言えそうだ。五五年に「人間国宝」に認定され六一年には文化勲章を受章している。国からの章を有り難いと思わぬ一枝は世間的栄誉に輝く人の妻として隣に寄り添えないのを情けないなどと思う気持は微塵もなかった。神近市子も丸岡秀子も井手文子も誰も彼も一枝について書いている人たちは一枝を「捨てられた妻」と断定して書いているがそれは違う。憲吉の方が捨てられたのだ。憲吉没後三三年の九六年五月十九日～七月三十一日まで富本憲吉記念館で「安堵帰郷五〇周年・富本憲吉書簡展」「『手紙待つ』――安堵から妻に宛てた二〇通」が開催された。四五年九月の陽宛の憲吉の手紙には、食料も不自由な東京から逃れて安堵で皆で暮らすことを提案しているが、ここには一枝が排除されている。ところが四六年九月二十一日からの手紙は正気に戻ったのか、農地改革に関わる財産問題など一枝に相談したいので来て欲しい、十月なら正倉院展も見られると日常生活についての細部にわたる報告をしながら懸命に来安を頼んでいる。このときは送金もしている。確かめもせずに妻をレズビアンと貶めた視線で触れ回ったものの怒りの興奮が冷めたのか、下手に出て頼んでいるが一枝の矜持は憲吉を許さず手紙を黙殺している。お金も突き返したようだ。四七年二月四日の手紙は一人ではやっていけない、かなしいと悲鳴に変わっている。自分の生きたい生き方を犠牲にしたのは母の躾に縛られていたのだと今更気付いたが憲吉の半身になって尽くしてき

たことへの悔しさから返事もせず送金も拒否したらしく、受け取って欲しいと書き、お涙頂戴戦術か健康の不調を訴えている。一枝は覚悟を固めて自分の足で立つ方途を摸索している。お嬢様育ちで経済的自立を考える必要もなかった一枝だが五四歳になって初めて自力で生きねばならなくなる。親しくなっていた中村汀女の俳人としての飛躍を助けて俳誌『風花』の創刊に全力を傾ける。一枝へのご機嫌とりか、この雑誌の表紙・扉・カットを憲吉が描いている。一枝の人脈から構成・編集されたこの雑誌によって汀女の名は高まり六〇年、ホテルニュージャパンで盛大に開催された百号記念大会時には全国規模の俳誌になっていて、講演・講座の要請もひきもきらぬようになりカルチャーブームの先駆けになった。憲吉の手紙は泣き落としに変わっている。作陶と子育てに一体となっていた頃を回想し、死が間近、会いたい、「東京より手紙なし、待つ」と感情に訴えた手紙が矢次ばやに速達で放たれている。一枝の心の傷は癒やされず無視。待っても待っても来ない手紙にせめて声を聞きたいと電話事情の悪かった時代で、京都まで行って長距離電話を申し込み、朝まで待たされながら通じない目を何度も繰り返している。一枝なしに生きることの困難さの自覚からあの手この手で孤愁、寂寥の心情を縷々と述べ「三十年一緒にいた」「相棒のあなた」に会いたいと願っている「余り長くない命」の「人間をあはれと思はないか」と痛々しい。要求から嘆願、哀願へと変わって必死になっているが一枝は応じない。一枝の気性を知っている憲吉は止むなしと態度を変え、兵糧攻めに出たのだ。

四八年、一枝は陽とともに、大谷藤子の山林地主の甥から援助を得て児童図書出版社山の木書店を起こすが所詮はお嬢さん芸、吉野源三郎『人間の尊さを守ろう』から五冊を出して破産した。壺井栄の『柿の木のある家』は第一回児童文学賞受賞作となったが借金を抱えての倒産で途方に暮れたがうらぶれた惨めさを見せぬのが一枝だ。この苦境を花森安治が救ってくれた。『美しい暮しの手帖』その後『暮しの手帖』となった雑誌に一枝執筆の頁を与えてくれたのだ。随筆とも掌編小説ともいえる含蓄のある物語を読者を子どもに焦点化して五二年十二月から死の前年の六五年七月までほとんど毎号の六十八回書いている。挿絵は切り絵画家出発となった藤森清治である。その後、藤森は切り絵画家の第一人者になっている。一枝唯一の著書となった『お母さんが読んで聞かせるお話』（１９７２・11、暮しの手帖社）がＡＢの二巻本で刊行されたのは一枝の没後六年だった。

憲吉の肺ガン死は六三年六月八日、七七歳だった。従三位勲二等旭日重光章の贈位叙勲、天皇陛下祭粢料その他偉大さを示す事柄を並べて新聞は大きく扱っている。遺言には葬式も戒名も墓も不要、作品を墓と思われたし、骨灰は火葬場に捨てられたし、だめなら共同墓地にとあったという。生家での葬式に五百人以上が会葬し、奈良県は村道に玉砂利を敷き詰めたという。喪主は長男の壮吉だったが、死のひと月前に選任された京都市立美術大学学長としての退職金二百万円を誰に渡すか苦慮した上で、手続きに暇取ったが最後を看取った石田寿枝（憲吉の同棲者）に渡したという。石田とは正反対に物欲皆無の一枝はそんなことは意に介さない。憲吉の作品も欲しい人にあげてしまうので一枝の手許には残されていない。対等に共に大きくなるつもりだったが結局は憲吉を大きくするために生きてしまったことに悔いが残るが離婚しなかったのは憲吉をそれでも愛していたからだろう。石田の存在を知っても平然と

していたのは本当に愛されているのは自分だという自負があったからだろう。石田が求めたに違いない結婚をせず、その気になれば離婚できたはずなのに憲吉が離婚しようとしなかったのは憲吉も一枝を本当は愛していたからだろう。一枝が憲吉にとってどれほど掛け替えのない人であったかを知りすぎるほど知っていたのだろう。

一枝が既に手遅れと気付いたのは死の一年位前だったらしいが死の直前まで『新婦人しんぶん』『婦人民主新聞』『子どものしあわせ』などに書き続けている。東京大学卒業後、映画監督になった壮吉が食欲の落ちた母に食べさせたくて小田原や三崎まで足を運んで求めてきた新鮮な白身魚を刺身にした一切れを、ガラスの小皿に凍らせた朝顔の花と葉を敷いて盛り付けたのを、鋭く豊かな味覚を失った一枝が「おいしいね、何処の魚？」と無理して食べてみせるのは息子の優しさへの感謝からであることを息子は知っている。死を間近にした頃、枕頭で読んであげた朝刊に「紅衛兵、北京に続々大結集」と言う記事があった。一枝がぽつりと呟いた。「急にはダメだねえーー。ゆっくり考えた方がいいんじゃないか」と。十年後、「まさしく死んだ母の言葉通りだ、いま思う」と壮吉が書いている。最晩年の「コラム」の署名は「紅」である。ここには死を前にしての尾竹紅吉の天真を伸ばしきれなかった悔しさが滲み出ているように思う。一枝の死には多くの人が溢れる愛惜の念の追悼文を寄せている。芸術的香気に満ち、自己顕示欲の微塵もない「人の世話をするために生まれてきたような」「道づくり」の人で、多くの人を輝かせた、と誰もが言葉多く語っているが、中野重治の長文の「富本一枝さんの死」の部分引用でこの稿を終わらせたい。中野が体調を崩して気分悪く臥していたとき電話で訃報を知らされた。「眼がさめてしまうのといつしよに自分が気落ちするのを感じた。気落ちはがくつというのとはちがつて、いくらかのろのろとして、しかし大きな半径で元に戻らぬものなことがはつきりしたたちのものだった」。一枝に初めて会ったのは三一年頃で童話作家の村山籌子に連れられてだが夕食を接待された。言葉がみつからぬが「豪華」「豪勢」なもので、野菜、肉の類もだが皿、鉢、小皿の類は「贅沢な味、贅沢な眺め」でそれは、「どれもこれも枠に入れて立てておく種類のもの」だったが、「罰があたるといった気持で」その美術品でむしやむしや食つたり飲んだりした。彼女は「くれたがりや」で「くれ方」が独特だ。二度目か三度目だったか、食事のときの皿を「焼物通なんかではない」単なる好みから何気なく好ましさを洩らしたら辞去するとき、断れない自然さで渡された。小田急線で偶然に乗り合わせたとき、降り際にチーズは好きかと訊かれ好きだというと持っていた袋から包みを出してにっこり笑って押しつけられドアは閉まったとも述べている。物資のまだ不自由な時代だった。やっと手にいれたものだろうに。一枝の独特の着物の着方。戦前に共産党員を匿ったことがある（憲吉が留守の一か月間、蔵原惟人を匿ったこと）。葬式の日は嵐だった。強風雨で停電した。帰れなくなった友人二人が中野重治の家に泊まり蠟燭の灯のもとで話し合った。普段着の写真がよかった。花がいっぱいあったが名札などいっさいないのが清潔で哀悼的だった。彼女は男のような立派な字を書く人だった、と中野はいった。中野は通夜にも葬式にも行っている。

一枝の肝臓ガンによる死は六六年九月二十二日。享年七三歳。安堵村槌屋裏に憲吉と並んだ四〇センチほどの丸石に名が刻まれていた。今もそのままだろうか。